

金色の影



心の児童文学館

ガーフィールド&ブリッシェン作

沢登君恵訳

チャールズ・キーピング絵

金 色 の 影

L. ガーフィールド & E. ブリッシェン共著

さわのぼり きみ え
沢登 君恵 訳

ぬぶん児童図書出版 1981

P. 296/A 5 判 (心の児童文学館シリーズ 10)

小学生上級以上～中学生

Leon Garfield and Edward Blishen

The Golden Shadow

心の児童文学館

■金色の影■ 定価1,200円

1981年2月15日 第1刷発行 ©

訳 者 沢登 君恵

発行者 横浜市南区永田東2丁目26-14

石 井 満

発行所 〒101 東京都千代田区神田須田町1の18

共同ビル9F (株) マネージ内

株式会社 ぬぶん児童図書出版

電話 (03) 252-0026 振替横浜15196

印刷 製本 大日本印刷株式会社

落丁・本乱丁本はお取りかえいたします。

8397-11000-6602

金色の影

ガリーフィールド
ブリッシェン
沢登君恵

訳作

THE GOLDEN SHADOW by Leon Garfield and Edward Blishen

Illustrations by Charles Keeping

Text COPYRIGHT © 1973 Leon Garfield and Edward Blishen

Illustrations COPYRIGHT © 1973 Charles Keeping

Japanese translation rights arranged through

WINANT TOWERS LTD., London

and Tuttle-Mori Agency, Inc. Tokyo.

ビビアン、
ナンシーそして
レナートへ



も

く

じ

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ネメアのライオン	中庭の八ひきのへび	死の競走	死に神との戦い	身代わり	メレアグロスの死	美少女アタランテ	目の中のへび	へびの襲撃	金色の目	予言
.....										
146	132	111	101	81	68	57	43	35	23	9



12	九頭の水蛇ヒュドラ みすへび	169
13	ふんの山	197
14	よみの国へ	215
15	女どれい	238
16	鎖を解かれたプロメテウス くさり	254
17	忘れられなかった予言 わす	264
18	果たされた予言 は	277

あとがき

著者を訪ねて

ことばの秘密 作品の秘密

表紙カット チャールズ・キーピング





1 予言

それは、ある朝、テッサリアではじまった。ひとりの若い漁師が、ゆつくりと砂浜を歩いてた。行く手に岩のみさきが立ちばかり、その向こうに漁師の小舟があった。漁師は、なれたまなざしで海をながめ、けさは大漁になりそうだとうなずいた。それから満ち潮がうちよせる波打ちぎわにそって歩きはじめた。すると朝日がまともに顔にあたり、目の前の海も空も陸も、オレンジ色と銀色と金色の光の中にとけて見えなくなった。漁師は、岩の影にはいろうと足をはやめた。そのときとつぜん、女の声がきこえてきた。漁師は、足をとめた。その声は、低くておだやかで、うつとりするほどきれいだった。漁師は、もともとうらおもてなどない純朴な若者で、盗み聞きするような人間ではなかった。だが、その秘密めいた声を耳にして、ついひきこまれてしまったようだ。漁師は、思わず息をひそめ、耳をすませた。

漁師が耳にしたことは、一言ひとことゆつくりと間をおいてきこえてきた。その声の主が、ずっと胸

にいてきたことをたずねるために、世界じゅうの時間をひとりじめにしているかのようなうた。

「教えてください——教えてください、わたしの夫になるのはだれですか？」

漁師は、口もとにほほえみをうかべた。そろそろとせまい岩の割れめに歩みよると、その中に体を押しこんで進みはじめた。割れめは、向こう側の砂浜にぬける手前でするどく曲がっていた。漁師は、その曲がりかどで立ちどまった。

波打ちぎわで、漁師の朱ぬりの小舟が波にゆれ、その影とよりそつて横たわっていた。そこからあまり遠くないところに、人がふたりすわっているのが見えた。ひとりは女で、両ひざを抱くようにして砂浜に腰をおろしていた。すその長い水色のうすい服を着ていたが、服のすそがまくれてくるぶしがむきだしになり、シダ模様の銀のサンダルがきらきら輝いていた。女の顔は見えなかった。豊かな黒い髪がたれて顔をかくしていたので、見えたのはふつくらしたほおだけだった。

もうひとりも女だった。だが、老婆だった。波ですりへつた石に腰かけていたが、その石のように年を重ね、威厳があり、静かだった。灰色の長い服を着て、腰を青銅の鎖のベルトでとめていた。そのわきの砂の上には、きちょうめんな家庭の主婦が薬草をはかるとき使うような木のはかりが、むぞうさにほうりだされていた。だが、老婆は、家庭の主婦のようには見えなかった。老婆には、若い漁師の足をすくませるような、近よりがたい威厳がただよっていた。

ふたたび漁師の耳に、昔から果てしなくくにかえされてきた質問が——恋にめざめた娘がだれでも、取

り入れの烟の片すみで、祖母にたずねたことのありそうな質問が——きこえてきた。

「教えてください、わたしの夫になるのはだれですか？」

老婆が動いて、はかりをつかもうと手を伸ばした。すると若い女が、そんなはかりなどで自分の未来をはかってもraitakunないというように、白い手でさえぎった。

「それなら、わたしが教えてやれるのは、」と老婆は、はかりから手をひっこめながらつぶやいた。「おまえが生む息子は、父親より偉大になるということだけだ。これでいいのかね？」老婆は、喜びも悲しみも感じさせない声でたんたんといった。「これだけ教えてやればいいのかね？」

「はい……はい。それだけ教えていただければけっこうです、大おばさま……。」

老婆は、うなずいて立ちあがった。はかりを鎖のベルトにはさみ、朝日に向かって砂浜をとぼとぼ歩きはじめた。漁師は、老婆の姿を見ていらなくなつて、目をふせ、足あとをじつと見つめていた。波がさらさらと押しよせ、足あとを洗い流した。漁師がふたたび目をあげたとき、老婆の姿はもうなかった。

だが、もうひとりの、水色の服を着た若い娘は、まだうずくまったまま、きらきら光るうつろな海のかなたをじつと見つめていた。体にびったりはりついた服から、輝くような豊かな肉体がすけて見えた。

漁師の胸は、狂おしいほど高鳴った。漁師は、岩の割れめをむりやりつき進んだ。たぶん、すでにそのとき、漁師は、海辺でのすばらしい恋の冒険の物語を——今までに海でつかまえたどんな獲物よりも、はるかにすばらしい獲物を、砂浜でつかまえた物語を——頭の中でつくりあげていて、それをみんなに話し

てやれるとわくわくしていたにちがいない。

漁師は、ごつごつした岩の割れめからつんのめるようにしてぬけだすと、金色の太陽をあびて背を伸ばした。漁師は、それは美しい若者で、自分でもそれをじゅうぶん心得ていた。

「娘さん、」と漁師は、そつと、だがどちらかといえはどうどうといった。「ぼくがあなたの夫になって、このぼくよりもすばらしい若者になる息子をさずけてあげましょう。」

漁師は、自信たっぷり微笑をうかべて返事を待っていた。今まで、娘にいいよつてうまくいかなかったことなどいちどもなかった。娘は、ゆつくりと立ちあがってふり向くと、漁師を見てほほえんだ。

娘の顔は、ちらつと見えただけだった。娘は、そのときにはもう位置を変え、漁師の真正面に太陽を背にして立っていたので、顔も姿も、黒くかげっていたからだ。漁師は、ひざががくがくした。汗が背中を流れはじめ、岩でこすった傷にしみてひりひりした。娘は、漁師があつと声をあげそうになったほど美しかった。だが、その顔にうかべた微笑には、はかりしれないほどの軽蔑がこめられていた。

若い漁師は、そのけがれの無い目にくやし涙をいっぱいうかべ、その場にくぎづけになったまま、娘を見つめていた。娘のうすい服は、すみずみまで太陽の光に照らされて、娘の裸身を包むうすい水色のもやのように見えた。娘は、漁師を招くかのように両腕を広げた。

「息子をさずけてくれるんですって、」と娘は軽い笑い声をたてた。「あなたよりも偉大な息子を？」娘が顔を動かしたので、漁師は、とつぜん目のくらむような光をまともにあび、痛さのあまり目を閉じた。

漁師が目をあけたとき、はかりを持ったあの威厳のある老婆と同じように、娘の姿はもうなかった。

「娘さん、娘さん！」と漁師はあわてふためいてさげんだ。「もどつてきてくれ！」

漁師は、狂ったようにさげびながら、砂浜をあちらこちらとかけずりまわった。だが、だれも答えてくれなかったし、だれもやってこなかった。漁師は、二時間以上もそこにとどまっていた。小舟のわきに横になり、暖かい砂にわけのわからない涙をしたたらせていた。やがて、小舟にはいあがつて腰をおろすと、両手でほおづえをつき、海を見つめた。胸が痛んだ。漁師は、自分があの娘に恋をし、ふられたのがわかつていた。

とうとう、ほかの漁師たちが、若い漁師がどうなったのかとさがしにきた。若い漁師は悲しげに、自分の恋の冒険と、とり逃がしたすばらしい獲物のことを話した。だが、みんなも同じ漁師だったので、したり顔をして微笑をうかべ、首をかしげた。

それを見て、若い漁師は腹をたてた。いくら漁師だとはいえ、ほんとうにあつたことを話していたからだ。そこで、仲間の漁師たちは、肩をすくめ、恋の病にとりつかれた若い漁師をひとり残してたち去った。時がたてばなおるだろうと……。

だが、時がたつても、漁師の恋の病はなおらなかった。それどころか、漁師は、その話をくりかえしくりかえししゃべりつづけた。ついには、テッサリアじゅうの人にその話をしてしまった。テッサリアを通る旅人までもひきこんで、旅人が休息しているあいだにむりやり話をきかせた。この若い漁師の話にわず

らわされなかったものは、だれもいなかった。話をしたあとかならず、若い漁師は——もう今ではそれほど若くなかったが——相手に訴えるような目を向けて、こういった。「あの娘がだれだったか知りませんか？」

漁師は、ほんとうにあの娘にひとめぼれしてしまったのだ。今でも、晴れた朝には、娘を見た砂浜にいき、夫をほしがっていたのに、自分をけんもほろろに扱ったあの娘を、声をあげてさがしまわり、返事がきこえないかと耳をすませていた。

やがて、ある晩、その村に、休息をとるためにというよりは、漁師の話をききたくて、ひとりの旅人がやってきた。その旅人は、頭がはげて目の悪い吟遊詩人だった。神がみや英雄たちの話を集めて物語にし、たて琴をかき鳴らしながらその物語を語り、お礼に食べ物や着る物をもらっている旅の詩人だった。吟遊詩人は、漁師の恋の冒険の話にすっかり魅せられてしまい、もういちどははじめから話してくれといった。漁師は、これほどのおせじをいわれたことがなかったので、たいへん喜んだ。漁師は、話し終えると、いつものように、答えてもらえるあてのない質問をした。「あの娘がだれだったか知りませんか？」吟遊詩人はほえんだ。あきらかに迷っているようだった。どちらを話してやったらいいだろうかと。「ねえ、きみ、」と詩人は、静かに、だが漁師の目をさけていった。「たしかなことはいえないんだが、わしは、きみが見たのは神ではないかと思う。たぶん、たぶんそうだ。銀のサンダルをはいた娘は、テティス

だと、思う。テティスというのは、かつてオリュンポスの山の上から海に捨てられた赤ん坊へパイストスを、海の底の岩屋で育てた海の女神だ。ヘパイストスは、はじめて鍛冶の仕事を手がけたとき、テティスにシダの模様のついた銀のサンダルをつくってやった。そんな神のつくった細工を目にしたきみがうらやましい。きつとすばらしい見ものだったにちがいない。」

「で——それで、もうひとりとは？」と漁師は、それをきくとひどく興奮してさげんだ。

吟遊詩人は、とつぜん自信がなくなつたかのように額にしわをよせた。「はかり……そうだ、はかりが決め手だが、」と詩人はいいよんだ。ふたりのすわっている小さな部屋に、ぞくつとするような冷氣がしのびこんできた。「きみが見たのは、女神テミスだろう。タイタン神族のひとりで、三人の運命の女神たちの母親だ。きみは秩序の女神テミスを見、その予言をきいたのだと思う。その予言がどういう意味なのか、わしらには知るよしもないがな。」

「テティスの息子は、その父親よりも美しくなるといったんです。」と漁師はくりかえしていった。

「テミスは、父親よりも『偉大になる』といったんじゃないのかな？」

「同じことじゃありませんかね。」と漁師はいった。美しいということほど、偉大なことはないと思つていたので。

吟遊詩人は、ほほえむと、漁師のたくましい腕を軽くたたいた。やがて詩人は、漁師をあとに残してたち去つた。漁師は、ようやくなつとくすることができた。自分は女神に失戀したのだ、女神が相手にして